

研究論文

高齢者の社会参加を促すサークル活動の映像分析 —習字サークルにおける「会話に入りにくい参加者」に着目して—

中山 莉子*¹ ・ 佐藤 浩*²

A Video Analysis of Calligraphy Club Activity Encouraging Older Adult's Social Participation:
Focusing on Participants who had Trouble Joining the Conversation

Riko NAKAYAMA and Hiroshi SATO

【要旨】社会参加は老年期において重要である。しかし、様々な理由で社会参加をしにくい高齢者が参加しやすいプログラムについてはこれまで十分に検討されてこなかった。そこで本研究では、多様な高齢者が参加する習字サークルに注目し、サークル活動の中で「会話に入りにくい参加者」が他の参加者と交流を持つ契機の特徴を探ることを目的とした。

分析の結果、講師の振る舞いの機能（視線を獲得しやすい存在と特徴的な「共時的」コミュニケーション）や、コミュニケーションが行われやすい環境（参加者の物理的配置と習字特有の間）によって、参加者同士の会話が促進される可能性が示唆された。以上のことから、個別学習のスタイルを持ったサークル活動の中に、他者との会話を生じさせたり、促進させたりしやすい仕掛けをソフト面やハード面に内包させることで、多様な高齢者の社会的活動への参加が可能になるものと考えられる。

【キーワード】 社会参加, 映像分析, サークル活動, 交流, 「会話に入りにくい参加者」

1. 問題と目的

社会的活動への参加は、高齢者の身体的・精神的健康にとってポジティブな影響をもたらすとされている。例えば、町内会やボランティア等の社会的活動に高頻度で参加する高齢者は、不参加者よりも精神的健康や身体的健康が高いことが示されている（本田ら, 2010）。また、社会的活動への参加が低い高齢者は、抑うつの高さ等のネガティブな影響をもたらす社会的孤立の傾向が高いという知見がある（江尻ら, 2018）。よって、社会的活動への参加を促進することは、より良い高齢期を過ごすために重要であると考えられる。

そのような社会的活動の一つに、地域の拠点で展開されるサークル活動がある。ここでのサークル活動とは、一貫した表記や定義がなく明確に定義することは難しいが、例えば、地域の高齢者ボランティア組織と趣味の会や町内会などの組織における活動を含めた自主活動（本田ら, 2010）、「個人的な趣味などの活動を含めた職業以外の集団活動」としての社会的活動（堀口・大川, 2018; 谷口, 2007）、「学習・社会参加」（内閣府, 2020）等と表現されているものである。このようなサークル活動のニーズは高く、高齢者にとって身近な社会参加の契機となり得ると考えられる。例えば、『令和2年版高齢社会白書』（内閣府, 2020）では、芸術活動を含む習いごと等の学習活動への意欲は60代で8割、70代で6割であり、高齢者のサークル活動に対するニーズの高さがうかがえる。

しかし、先行研究において焦点化されてきたものの多くは、積極的に継続してサークル活動等の社

*¹ 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース修士課程 *² 東京大学大学院教育学研究科身体教育学コース博士課程

会的活動に参加するような活発な高齢者であったと考えられる。例えば、社会的孤立の要因となる転居者への支援プログラムの効果に関する研究では、プログラム継続参加者に関して日中独居頻度の改善等のポジティブな影響が示されたものの、不参加者は「体調不調、忙しさ、興味のなさ」等の理由によって、参加を継続できていなかった（斎藤ら、2006）。また、従来、介護予防として取り組まれることの多い運動サークルに関する研究も、多くが継続的な参加を前提としており、参加者の元々の動機付けの高さが背景にあるといえる（e.g. 加藤ら、2013）。以上より、高齢者のサークル活動に関する研究は、地域活動に何らかの理由によって参加しにくい高齢者にとって参加しやすい活動とはいかなるものかについては検討が不十分であったといえる。

これと別に、社会参加における「活動を共にする他者」の存在が指摘されている（古谷野、2016；堀口ら、2018）。古谷野ら（2016）は、日常生活において高齢者が交流している親族以外の他者を分類し、生涯学習のクラスで一緒の人等の特定の場所あるいは場面を共有している他者である「場を共有する他者」が2番目に多い事を示した。また、堀口・大川（2018）は、社会参加への高い動機づけのためには「活動内の仲間関係の良好さの認知」が重要であることを示している。しかし、このように社会参加における「活動を共にする他者」との交流の質の重要性が示唆されながらも、プログラム内の交流の詳細を検討した研究はほとんど存在しない。

以上のことから、本研究では、他者との交流を持ちにくい高齢者（会話に入りにくい高齢者）が参加し、活動を通して他者との交流が生じている都市部の地域拠点にて行われる習字サークルの活動に着目する。そして、このサークル活動において、会話に入りにくい高齢者が、サークル内の他者と交流を持つ契機、具体的には「会話の開始」を探ることを目的とする。なお、すでに今回対象としているサークルにおける「会話の開始」については、坂井（2021）による緻密な会話分析によって、「活動の合間」という局面と「お手本」という共通の基準が、話し掛けるきっかけになることが示されている。本稿では、同じく「会話の開始」の場面に注目するものの、講師の働きかけや、物理的な環境面を中心に分析を行うものである。

2. 方法

2.1. フィールドとサークル活動の特徴

本研究のフィールドは、東京大学高齢社会総合研究機構（The Institute of Gerontology; IOG）が運営する千葉県柏市内のコミュニティ・スペースである。このスペースは団地内の商店街に立地し、地域住民が誰でも参加・利用できる貸しスペースとしてオープンしており、地域内外の団体によって音楽鑑賞や運動プログラム、介護者交流カフェ等、日々様々な活動が行われている。

本研究では、その中の活動の一つである習字サークルの調査を行った。習字サークルでは、コミュニティ・スペースの開館当初から、月2回の活動が行われており、初参加者や常連の人も含めて毎回30名以上が参加している人気の活動である。参加者は100円の参加費さえ払えば、事前準備をしなくても、用意されたお手本と習字道具を使って気軽に参加することができる。この習字サークルにおける指導は、参加者が自由に字を書いている中、講師が各テーブルを巡回し、場を和ませるような雑談を交えながらその場で字の書き方等を指導するという緩やかな構造となっている。

以上より、本研究における習字サークルの特徴は、(1) 参加者の数が多く人気のある活動であり、(2) 常に新しいメンバーが参加し、(3) 気軽に誰でも参加でき、(4) 講師のファシリテーションに特徴があるという4点にまとめられる。

2.2 分析の対象

上記の特徴を持つ習字サークルの活動の中で、本研究では特に「会話に入ることが難しい」参加者を分析の対象とした。習字は字を書くことが第一の目的であり、会話をする必要はないために大抵は静かな空間である。その一方で、習字特有の構造もあって（坂井，2021）、参加者の間では自然に会話も生じている。しかし、この中で、映像を分析していくと、習字サークルの中で「会話に入ることが難しい」参加者の姿が見られることに気づいた。他者との交流を含んだ活動に何らかの理由で積極的に参加しにくい高齢者に着目するという本研究の目的において、この「会話に入ることが難しい」参加者に着目することが妥当であると考え、分析対象とした。

本研究における「会話に入ることが難しい」参加者とは、聞こえにくさがある男性と、他の参加者との交流が少ない女性の2名のことを指す。参加者の配置は図1の通りである。アルファベットの書かれた白丸は参加者、灰色の台形二つはテーブルを指し（実際のテーブルの形を模している）、矢印は撮影したカメラの方向を指している。参加者の関係性は、Kは初参加者であり、H, I, Jも友人同士ではなかった。

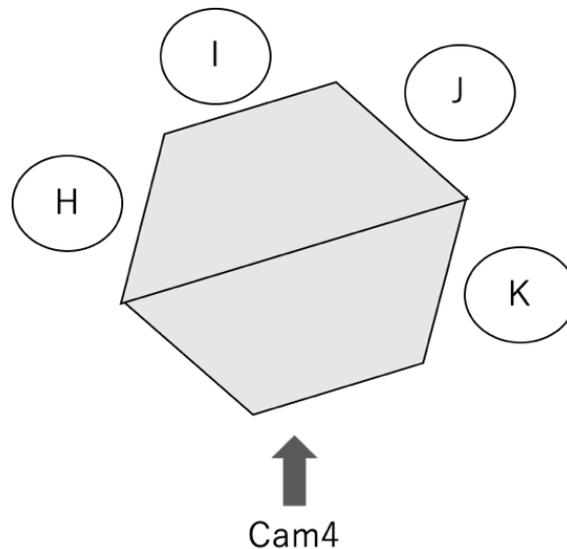


図1. 参加者の配置とカメラの位置

2.3. データ収集の手続き

主催者と参加者同意を得て、習字サークルの開始から片付けまでの様子をビデオと音声によって記録した。データ収集は、2018年9月に行われ、研究協力者は参加者10名と講師1名の計11名であった。撮影時間は約2時間で、カメラの配置は図1の通りである。調査は、東京大学の倫理審査を経て実施された。

2.4. 分析の手続き

撮影した映像に関して、一つのテーブルに着目し、1秒ごとに参加者のI（男性）とH（女性）が「何を行っているか」「誰と誰が話をしているか」について、「半紙の切り替え」「集中して取り組んでいる」「周囲の人を見ている」「特定の人を見ている」「会話している（笑いを含む）」という5つの項目に分けてその動きや会話を記録したタイムライン（図3, 図5）を作成した。そして「会話に入ることが難しい」参加者（H, I）と周囲の人との相互作用が起きている場面に着目し、その相互作用がどのように生じているかについて検討した。

3. 結果

会話の開始の特徴として (i) 講師を介して「場」が共有されるパターンと, (ii) 動作の合間に会話が開始されるパターンの2つが特定された。以降, 会話の開始とその後の展開を示した図 (展開図とタイムライン) とその説明を示す。図中の記号は, 以下の通りである。アルファベットの S が記された水玉模様の円は講師であり, 各アルファベットの記された白丸は参加者4名 (H, I, J, K) である。点線は I の視線の範囲を指し, 矢印の方向は I の視線の方向を指す。各丸の番号は会話が開かれた順序を指す。

タイムラインは, それぞれの行の行為が1マスにつき1秒間行われたことを示す。また, 特殊な場合として, 図4における笑いは備考欄に示されている。図5では, 「会話をしている (笑い)」の行の黒塗りは, 会話が生じていることを示し, 格子状のパターンは「笑い, もしくは微笑み」を示す。

(i) 講師を介して「場」が共有されるパターン

Iは, 習字サークルの活動中, 他の人と自分自身から積極的に周囲の人に対して話をしたり, 独り言をつぶやくことは少なかったが, 講師へのリアクションという形で, Iが会話のきっかけをつかみ, 他者との交流が生まれていた場面があった。

周囲との交流の開始 (会話の開始) の流れは以下の通りである。まず, 黙々とお手本を見ながら書いている (「集中して取り組んでいる」) Iに対して, 講師が字の書き方について指導を始めたため, Iは講師の方に視線を向けた (図2の①)。そして, Iが講師の話を受けて視線を動かし左側を見て何かを呟くと (②), Iに対してJとKが微笑み返した (③)。その後, JとKのIへの注目がある中で, Iが周りには聞こえないような小さい声でお手本を指し, 講師に対して何かを発言した。講師はそれに対して「そっち (Iが書いた文字) 直せて?」と冗談のように笑いながら周囲のH, J, Kに聞こえるように話し, テーブルの全員が笑った。

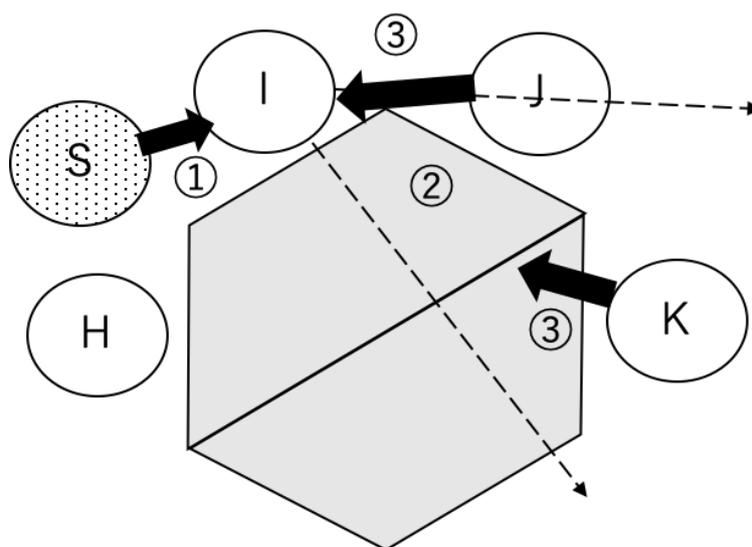


図2. 講師を介して「場」が共有されるパターンにおける会話の展開図

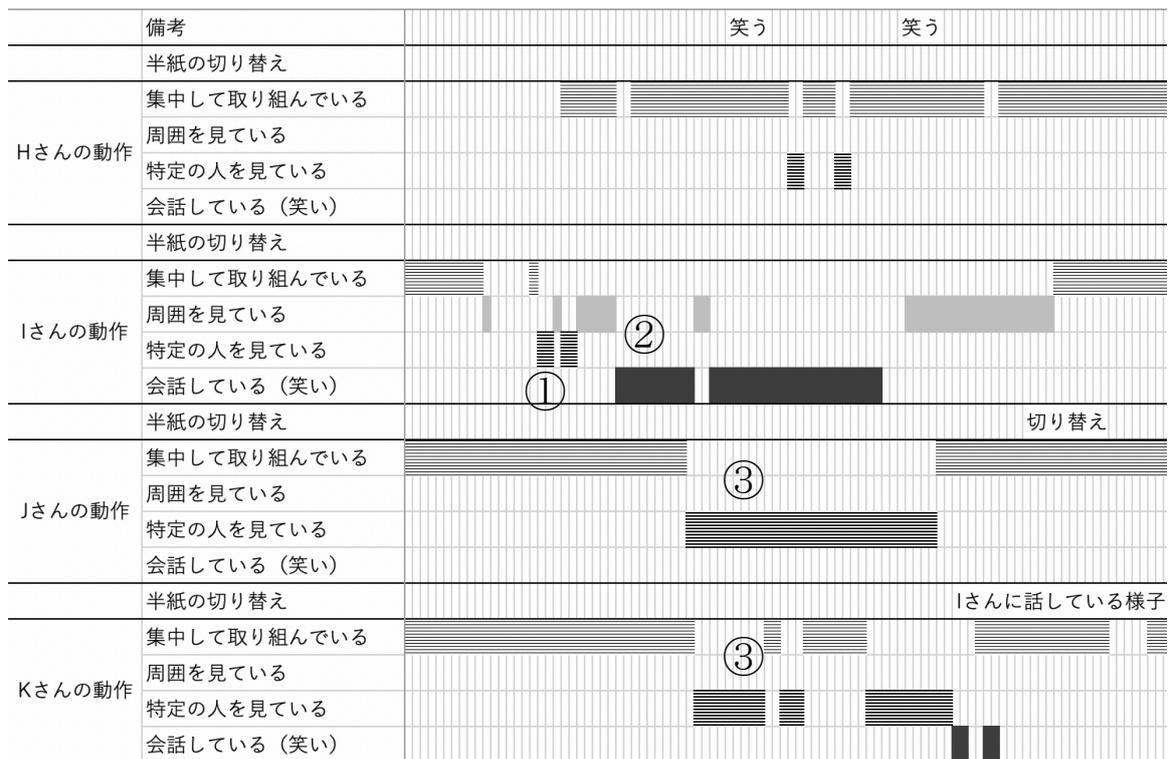


図3. 講師を介して「場」が共有されるパターンにおける会話の展開のタイムライン

(ii) 動作の合間に会話が始まるパターン

Hは、これまで何度か他の人に話しかけるも、同じテーブルの他の人が熱心に書いている中で、会話が拾われない状態にあった。ここで会話が展開された時、Hは同じテーブルの他の人が話しているタイミングで字を書く手を止め、J、Kの会話の続きに入っていくことで、会話が始まっていた。つまり、Hの動作の休みの合間に会話が始まるパターンとなっていた。

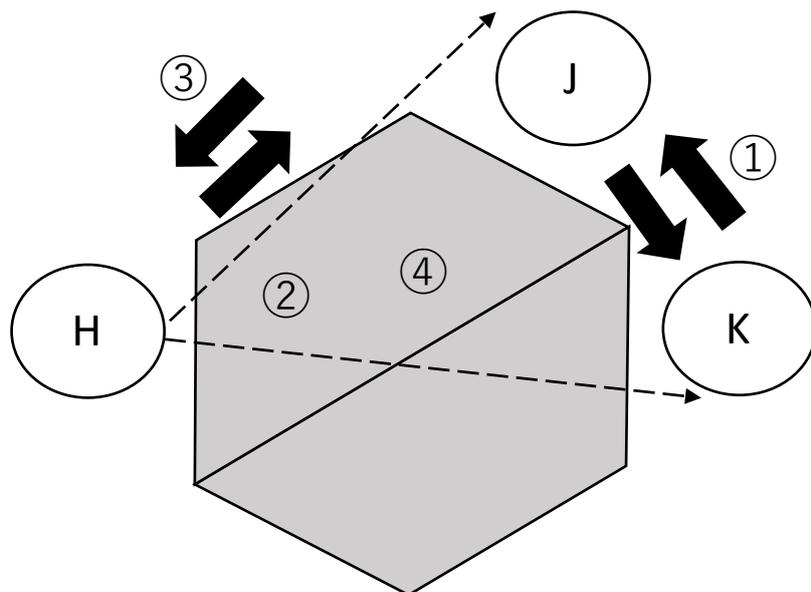


図4. 動作の合間に会話が始まるパターンにおける会話の展開

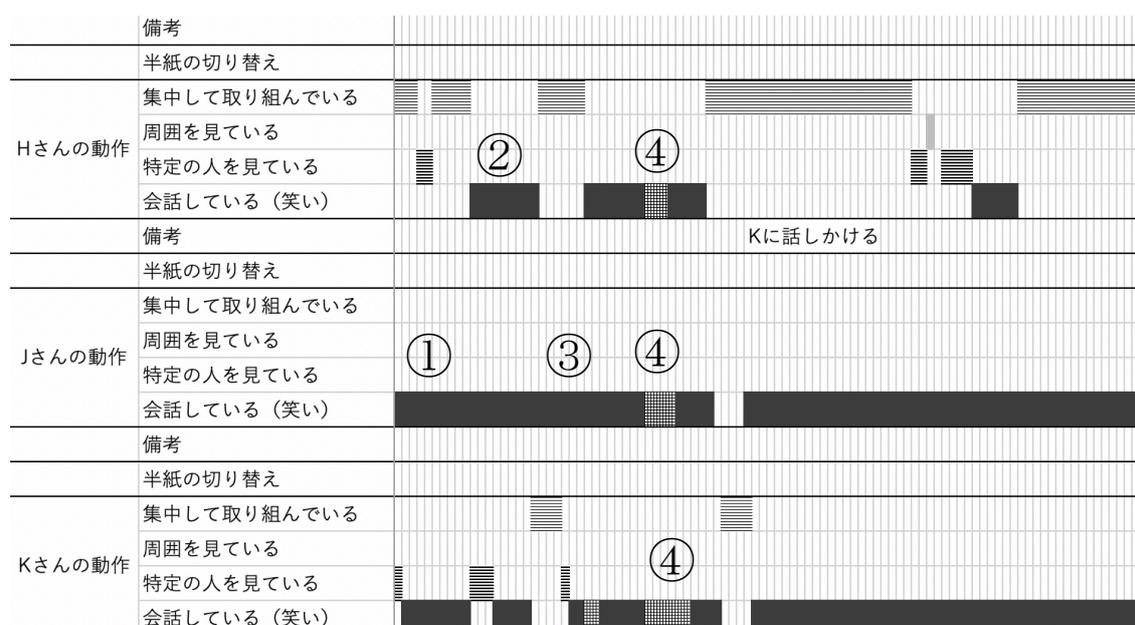


図 5. 動作の合間に会話が始まるパターンにおける会話の展開のタイムライン

周囲との交流の開始（会話の開始）の流れは、まず、J、Kの書き方に関する会話（①）が区切れたタイミングで、Hが一文字書き終え、墨を筆につけながら（J、Kの会話に関連のある内容を）場に話しかける（②）。すると、Jがその発話を拾い返答する（③）。その後、H、Jの会話をうなずきながら聞いていたKも含め三人で顔を合わせて笑っていた（④）。

4. 考察

まず、Iの事例のみに見られた会話の展開について考察する。Iでは、既に注目を集めている講師がIとの会話を他のテーブルの人に聞こえるように話すことによって会話が展開されていた。ここで、会話が展開された文脈を考えると、周囲の注目を集めやすい講師の存在と、Iの話を周囲に伝える講師の特徴的なコミュニケーションによって、Iを取り巻く会話を行う状況が生起したと考えられる。

また、IとHで共通する要素として、コミュニケーションが行われやすい環境が両者に周囲との交流を持つ機会を提供していたと考えられる。ここでは、以上の状況について、講師の振る舞いの機能とコミュニケーションを可能とする環境の二つに大別して考察する。

4.1. 講師の振る舞いの機能

まず、講師の振る舞いの機能について考察する。周囲の注目を集めやすい講師の存在は、会話が展開される要素として重要な役割を果たしていたと考えられる。Goodwin（1981）は話し手が話し手となる時、聞き手の注目を集める必要があると述べている。今回の分析結果から、講師が教える存在という特有の位置にあることによって、会話における話し手として機能するための周囲の注目を集めやすかった可能性が考えられる。Iを取り巻く会話の展開を見ると、Iという存在がなくとも、周囲の参加者が聞き手となりやすいことが示唆されているものと考えられる。つまり、講師という存在は、周囲を巻き込みながら会話を開始することを可能にする要素の一つとして機能していたと考えられる。

次に、Iの発言に対する講師の特徴的なコミュニケーションが、周囲を巻き込んだ会話をさらに可能にしていたと考えられる。講師は、Iの発言を特徴的に繰り返しながら大きな声で発言することに

よって、Iの発言が聞こえる範囲を拡張していた。ここでは、従来の「個別学習」の形式からすると、個人が知識を獲得するために学ぶこととは異なったコミュニケーションが展開されていることがうかがえる。

今回の習字サークルの取り組みの形式は、各自がお手本を参考にし、各自のタイミングで取り組み、それに対して講師が指導するという「個別学習」の形式をとっていた。基本的には、講師から生徒に対する個別指導が行われる場合、課題に取り組む際の声かけや質問への応答か、課題への取り組みに対するフィードバックがなされることになる。しかし、今回の講師の発言は、Iの課題への取り組みそのものに対してではなく、Iの講師に対する発言を特徴的に繰り返すという応答をすることで、Iも含めた周囲に笑いをもたらしていた。

このことを、学習が社会的に構成され、「人が実践の共同体に参加することによってその共同体の成員としてのアイデンティティを形成する」と考える「協働的学習」観に基づいた状況論的なアプローチから考察したい (Lave & Wenger, 1991)。この場面では、講師が周囲との関わりを促すコミュニケーションを行うことによって、周囲との会話に参加する者としてのIのアイデンティティを形成していたと考えられる。講師の「場の関係性」の形成を促進するような働きかけは、Iのような自ら会話を展開しない参加者にとって、周囲との協働感が生じやすい状況を作っていた可能性があるといえるだろう。

さらに、そのような周囲との会話の展開によって、発話を伴う会話の継続という形ではなく、笑いが生じるという感情の共有がなされていた。佐伯 (2014) は、実践への参加としての「協働的学習」において人々が学ぶことの理由を、古瀬 (1996) の *conviviality* の訳語から共に楽しみ合う関係だと述べ、この「共愉的關係」を他者と生み出すことが、関わること (学ぶこと) であると論じている。

ここから、講師のコミュニケーションは、周囲との関係性を構築するのみならず、関わるのが共愉的なものとなるような特徴を備えていたと考えられる。これは、先行研究でその関係の重要性が指摘された「活動を共にする他者」に関して、その関係性を良好なものにする工夫が、講師の振る舞いによって促進されていたと考えられる。

以上のことから、講師という立場や、講師による周囲との関わりを促進するコミュニケーションによって、協働的な学習、すなわち「共愉的關係」を構築する関わりが促進され、Iを取り巻く会話の展開が可能となった可能性が考えられる。

4.2. コミュニケーションが行われやすい環境

次に、両事例に共通する特徴であるコミュニケーションの促進を可能とする物理的な環境について考察する。IとHの事例に共通するものとして、基本的に静かな中にも会話が可能となる雰囲気があった。今回扱った習字サークルに限らず、習字は、手本を見ながら個々人が作品を仕上げるという個人作業であるため、基本的には会話を必要としない。そのような空間では、基本的に、半紙を交換したり、紙の上で筆を運ばせる音が静かに聞こえてくる静寂な空間が構成される。

しかし、今回の習字サークルでは、参加者は黙々と個人作業を続ける中で、時折参加者間で会話が生じていた。講師もまた、時折全体にむけて話をする (指導をする) 等、静かな空間は不規則に存在していた。このように、会話をする機会が設けられていたり、会話を可能にする雰囲気が場に埋め込まれていることによって、参加者はコミュニケーションをとりやすかったものと考えられる。

また、このような会話をする空間が不規則に生じることは、参加者に会話への参加の選択肢を与え、参加自体への敷居を下げる可能性も示唆されている。静と動の両方の性質が備わった社会参加の契機

となる場では、参加者は話を行わずとも他の参加者と同じ空間を共有するだけでもその場に存在することができる。このことで、従来の社会参加に積極的な参加者というだけでなく、あらゆるタイプの参加者の多様な参加の形式を可能にするのではないかと考えられる。

以上より、「活動を共にする他者」とのコミュニケーションを行うことが義務づけられていないという環境的自由さの中で、偶発的なコミュニケーションが生じる余地も合わせ持つことが、社会的な活動への参加を得意とするかどうかにかかわらず、参加者が場に溶け込むための要素として機能しうるものと考えられる。

また、物理的な近接性も周囲の人々とのコミュニケーションを促進していたと考えられる。習字サークルで使用されている机は六角形であり、参加者は互いに自然と視線が交わりやすい場に配置されていた。また、両隣も比較的近い配置となっていた。この点について、西阪（2009）は、「身体配置の空間的な構造が1つの構造として知覚できるのは、相互行為時間的な展開において、他の構造との差異が際立たされる」時だと述べており、構造とは「志向の空間的配分の偏り」のことだとしている。そして、ここにおける他の構造との際立った差異とは「様々な身体部位のうえに表示される志向の配分が特定の偏り」を持つ時であるとしている。

この西阪（2009）の「志向の配分の偏り」＝「構造」の議論に焦点を当てると、まず、使用されている六角形の机は、参加者同士が視線を合わせる機会をほとんど均等に確保するという点で「志向の配分の偏り」は生じていない。しかし、習字においては自然な視線を上げるタイミング（H）や、他の人への話しかけが他の参加者にも伝わり拾われる時に（I）、周囲との会話が展開されていた。よって、参加者の配置という物理的な近接性と、習字における視線が交わるタイミングがあるという要素の重なりによって、特定の会話が生じやすい構造が生まれると考えることができる。

しかし、コミュニケーションが生じやすい環境の中において、会話は自然に生じるわけではない。今回のデータから、Hは筆に墨をつけるタイミングで自然と視線をあげ、目の前の2人に対して話しかけたが、お互いが共通の話題としてもつ習字に関連することについてHが能動的に尋ねることによって、周囲との会話の展開が可能となっていた。この点は、制度的に設けられた「活動の合間」が会話の開始の契機となっているという、習字特有の構造に関する坂井（2021）の指摘にも通じるものがある。また、Iも講師の指導を受け、J側を向いたタイミングで何かを発言することによって、JとKという周囲の人との会話が生じていた。

よって、コミュニケーションが行われやすい環境下で、参加者間で会話が生じる時には、話し手が何らかのレベルで能動的な動作を行い、それが周囲に拾われることが必要になると考えられる。

5. 本研究の意義と限界

本研究では、「会話に入りにくい参加者」と他者との交流が生じる特徴を、サークル活動を構成する人や場所、コミュニケーションという幾つかの側面から検討し、地域のサークル活動における社会参加の展開を具体的に示した。

本研究の分析では、多様な高齢者が社会的な活動に参加するためには、視線を集めやすい講師の存在と、会話の開始を促し、協働的で「共愉的」な周囲との関係を構築する講師のコミュニケーションという講師に関する要因が明らかにされた。これに加えて、環境面に焦点を当てると、参加者同士の近接性とサークル活動に内包された自然な合間、そして何らかのレベルにおける参加者の能動性という相互交流の生じやすい要素が、サークル活動の場に内包されていることの重要性が示唆された。

よって、社会参加の契機としてのサークル活動には、話すとも話さずとも参加できるという嗜好性

が異なる個人にあわせた参加の仕方が可能な個別学習のスタイルを基盤として、他者との会話を生じさせたり、促進させたりしやすい仕掛けをプログラムのソフト面やハード面に内包させていくことによって、多様な高齢者の社会的活動への参加が可能になるものと考えられる。

本研究におけるデータ分析の限界として、実際のテーブル内の会話の詳細を十分に扱っていない点、習字サークルの活動の後半部分しか扱っていないことによって、時系列の変化を検討できていない点が挙げられる。また、今回得られた知見である講師の「共情的コミュニケーション」が、習字サークルの活動の全体の中でどのように行われているのかについて、その他のコミュニケーションとも合わせて検討する必要がある。詳細な会話の内容、時系列的变化、そして講師のコミュニケーションの特徴の全体像といった点について、今後検討していくことが求められる。

【引用文献】

- 江尻愛美・河合 恒・藤原佳典・井原一茂・平野浩彦・小島基永・大淵修一 (2018). 都市高齢者における社会的孤立の予測要因：前向きコホート研究 日本公衆衛生誌 65(3), 125-133.
- 古瀬幸広・広瀬克哉 (1996). インターネットが変える世界 岩波書店.
- Goodwin, C. (1981). *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. New York: Academic Press.
- 堀口康太・大川一郎 (2018). 高齢者の社会的活動への動機づけと他者との関係性の関連：活動内の仲間関係、配偶者、子供、孫の4側面に着目した検討 教育心理学研, 66(3), 185-198.
- 本田春彦・植木章三・岡田 徹・江端真伍・河西敏幸・高戸仁郎・犬塚 剛・荒山直子・芳賀 博 (2010). 地域在住高齢者における自主活動への参加状況と心理社会的健康および生活機能との関係 日本公衆衛生誌, 57(11), 968-976.
- 加藤智香子, 藤田玲美, 猪田邦雄 (2013). 二次予防事業対象者に対する運動器機能向上プログラムの参加者特性と介入効果の検証 日本老年医学会雑誌, 50(5), 338-346.
- 古谷野 亘・澤岡詩野・菅原育子・西村昌記 (2016). 高齢者が日常生活において交流している他者との関係：その分類と把握 老年社会科学, 38(3), 345-350.
- Lave, L. & Wenger, E., (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*, Cambridge: Cambridge University Press. (佐伯胖 (訳) (1993). 状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加 産業図書)
- 内閣府 (2020). 令和2年版高齢社会白書 日経印刷.
- 西阪 仰 (2009). 活動の空間的および連鎖的な組織：話し手と聞き手の相互行為再考 認知科学, 16(1), 65-77.
- 佐伯 胖 (2014). そもそも「学ぶ」とはどういうことか：正統的周辺参加論の前と後 組織科学, 48(2), 38-49.
- 斎藤 民・李 賢情・甲斐一郎 (2006). 高齢転居者に対する社会的孤立予防プログラムの実施とその評価の試み 日本公衆衛生誌, 53(5), 338-345.
- 坂井愛理 (2021). 社会参加の会話分析：習字教室における会話の開始を題材に ライフ・レジリエンス学, 1, 10 頁.
- 谷口幸一 (2017). 高齢者への臨床社会学的アプローチ, 谷口幸一・佐藤眞一 (編著) エイジング心理学：老いについて理解と支援 北大路書房, 193-215.

【受理日】(2021年3月10日 受理)